

ソーム・ジェニンスの『舞踊術』（初版）

海老澤 豊

“ Soame Jenyns’s The Art of Dancing ”

Yutaka EBISAWA

平成20年（2008）
新潟産業大学人文学部紀要
第19号抜刷

ソーム・ジェニンスの『舞踏術』(初版)

海老澤 豊

第一巻

優雅な物腰で動いて、流れるように踊り、
注意しながら易々と、活発だが落ち着いて、
響き渡る調べが伝える指示を心に留めながら、
正しい足取りで各々の調べ良き音楽に従い、
精妙な技術で丸く円を描くように足を運び、
低く体を沈め、また軽やかに飛び跳ねる術を、
私は教授する。現われ出でよ、聖なる合唱隊よ、
柔らかいリリートを奏で、響く豎琴をかき鳴らせ。
フィールディング嬢の命に従い、汝らの親切な助力を
もたらし、彼女の足元に慎ましい捧げ物を投じよ。
彼女の目が(この詩は彼女に捧げられるのだが)
初めて詩に歌われる主題を見てくださいように
汝、天上のヴィーナス、神々しき女神よ、
汝の玉座や、常に神聖な神殿のまわりを、
無数の恋人たちや、微笑や、優美さが飛び交い、

十五

色鮮やかな翼で澄み渡った空を羽ばたいている。
もし、汝がクレタ島の木陰で神聖な舞踏を
楽しみながら探し求めたことがあるならば、
ここに小さな軽快な従者たちを率いて降臨し、
美しい女王よ、詩人の歌に助力を与えたまえ。
また汝、広大な天上の世界を支配する者よ、
この慎ましい主題を軽蔑するな、万能のジョーヴよ、
汝のためにこの術は慎重なレアが始めたもので、
最初は野蛮な敵を欺くために生み出されたのだ。
汝のために彼女は訓練した者たちに命じて前進させ、
様々な円を描いて神秘的な舞踏を率いたのだ。
汝のために彼女は甲高い喇叭に命じて空を震わせ、
(独創的な発想だ) 幼子たる汝の鳴き声をかき消した。
青ざめた乳母は、全身を震わせ、不安に駆られて、
無事に群衆の中へ天上の預かり物を運んだのだ。
天で生まれた舞踏術は後に人間界へと飛来し、
彼らの宗教の大きな一部を占めるまでになった。
天上の恵み深い神々が、彼らは賢明にも考えた、
最初に自ら教えた術を認めて下さるに違いないと。
そして司祭たちは、大事な聖なる日が来るたびに、
(舞踏や祈祷もできぬほど怠惰でなかったのだ)
神秘的なステップで活発に飛び跳ねつつ進み、

三五

三〇

二五

二〇

芳香の匂いたつ祭壇のまわりで踊ったのだ。

巨大な神殿や、丸天井になった屋根いっばいにあふれる調べと木霊する旋律が響きわたった。

神聖な壮観を楽しみながら、神々は耳を傾け、あらゆる祈りは音楽の翼を生やして昇天した。

万歳、幸福な時代よ、万歳、傑出した日々よ、その頃、芸術は称賛という正当な報酬を受けていた。

その頃、音楽も、彫刻も、絵画もあふれて、あらゆる芸術家が名声と利益に飾られていた。

その頃、月桂樹の花冠が勝利者の頭を飾り立て、一方慎ましい月桂樹が詩人の額に広がっていた。

舞踏家の寛大な術も、彼らに劣らぬ報酬と、やはり劣らぬ名声の分与を求めていたのだ。

舞踏家に大いなる者はすべての宝物を示し、舞踏家のために大理石の彫像を立てたのだ。

英雄や王侯たちがこぞってその快い術を認め、彼らが愛するものに抜きん出て輝いたのだ。

軍馬を制御し、切先鋭い矢を投げつけることは戦士の役割の半分に過ぎないと考えられていた。

完璧な英雄はみな、舞踏会を飾り、戦場で剣をきらめかせる術に等しく精通していたのだ。

英雄は勝利を得て、戦に勝ち、諸国民を従え、

四〇

燃え上がる町を打ち壊すだけが全てではなかった。高い代価を払ったビュロスも、舞踏によってその名を残す者に比べれば名声も半分に留まる。

賢者よりもさらに学識を積んだ哲学者も、

あの至福の時代にこの有益な術を軽蔑しなかった。

彼らは教えた、その快い運動は、頭脳を明晰にし、

血液を浄めるのに役立つのだと、

疲弊した精気が活発に流れるようになり、

血色の良い頬が健やかな赤らみで輝くのだと。

アテネの賢者は、その学識でつとに知られ、

聖なるフィーバスにデルフォイの玉座から、

最も賢い人間だとお墨付きを与えられたが、

舞踏に関心を寄せることが無価値だと思わず、

老齢と打ち枯らす歳月が、彼の雪のように

白い頭に、誉れ高き霜を撒き散らした時でも、

賢明な哲学者はこの術をなおも追い求めて、

筋肉を引き締め、凍りかけた血を温めたのだ。

その頃は、詩歌も舞踏の良き友であった、

あらゆる詩神たちがそのステップに従った。

等しい優美さをたたえて、ヘシオドスの聖なる

詩行では、英雄と舞踏家が等しく輝いている。

「ある者には剛勇を神々は与え、ある者には

六〇

六五

七〇

七五

八〇

舞踏術の才能を授けた」と彼は歌っている。

さらにホメロスの高遠な詩行にも、メリオンの魅力的なステップと優美な物腰が見られるのだ。常に舞踏で彼は我々の驚嘆する眼を魅了し、

ギリシア人とトロイア人は彼に褒美を与えた。

八五

だが止まれ、さまよう詩神よ、もう寄り道せず、急いで汝の定められた道を進んでいくがいい。

まずどんなドレスが舞踏会を最も引き立たせるか、活発な舞踏で動きやすい衣装について語れ。

九〇

薔薇色の頬をした乳搾り娘は、毎朝柔らかな

絨毯のような露に濡れた草地の上を歩く時に、

ペティコートをたくし上げ、ボタンを履いて、

夏の驟雨も冬の雪も物とはせずに進んでいく。

九五

一方で高慢な都会の娘は、贅沢に着飾った美女よ、常にピロード張りの椅子駕籠にだらりと寄りかかり、

輝く銀の留め金のついた高価な絹の靴下に包まれた

自分の足が地面に触れることを常に恐れている。

兵隊は羽飾りをなびかせ、緋色の軍服に身を包み、

血と殺戮にまみれた人生を送ることを示している。

一〇〇

一方で僧正のローン地の帯は、二重顎の下で、

中に神性が宿っていることを平明に語るのだ。

このように各人の衣服はその生業に合致しており、

乗馬でパンプスを、舞踏でブーツを履きなかれ。

だが、円を描く舞踏でくると回転する者よ、

柔軟な靴底はあくまで薄く、踵は低くするべし。

不恰好な装飾をつけて肩を圧迫してはならず、

風通しの良い、軽い、緩やかな服を選びたまえ。

絹の紐できつく結びつけた剣を、腰のあたりに

ぶら下げて、無用な重さを余分に加えるなかれ。

一一〇

そんな無粋な武器はここでは称賛を得られず、

我々が恐れるのは傷でなく美女の視線なのだ。

羊毛のドラップや、英国の暖かいプロードクロスは、

御者を吹きなぐる風雨から十分に守ってくれる。

だが舞踏家にとつてはあまりにも重過ぎる負担で、

あらゆる毛穴から汗がどつと噴き出すことになる。

一一五

むしろ舞踏家は、薄いキャンブレットか、光沢のある

ボードソフで身を包み、活発な手足を見せるべし。

だが野卑な規則で私の歌を停滞させることなく、

万人の知る教訓で私の韻文を長引かせるな。

一二〇

なぜ私は今、飾り立てた色男に命じねばならぬか、

機敏な手に合わせた清潔で白い手袋をはめよと、

また気を失いかけた美女のために、時計隠しには

元氣をつける酒精や気付け薬を忍ばせておけと。

なぜ私の歌は若者たちに忠告せねばならぬか、

一二五

雪のように白い埃が鬘から浮かばぬようにせよと。相手の女性が、レースが駄目になった、輝く絹が脂ぎった髪粉で汚れたと嘆くことがないように。慎重な若者に用心せよと命じる必要もなからう、直立した針をバツクルに立てておかenようにせよ。切先の尖った金属は女性のストッキングを裂き、近づいてくるペティコートの妨げとなるからだ。今度は、若々しい美女たちよ、汝らに歌おう、快い微笑を浮かべて私の有益な労作を見たまえ。汝らのために蚕は見事に作り上げた織物を示し、勢いよく回る糸車が蚕の小さな生命を奪い取る。汝らのために光る宝石はまばゆい色で輝き、天の弓を描き出す色合いと同様に美しい。汝らのために大海原は真珠という宝を明け渡し、大地は秘蔵していた金の鉱山を開け放つのだ。自然はこのように贈り物を与えるが、汝自身がその贈り物を技で配分しなければ無駄に終わる。だがニンフよ、きらめく舞踏会で、指示した一種類のドレスが万事にふさわしいとは考えるな。富と技術が結びついて、美しい衣服をこの上なく見事に仕上げた時に、最も明るく輝くのだ。略装であつても別のものが我々の心に忍び込み、

一三〇

一三五

一四〇

一四五

生来の美に富んでおり、技術にも欠けていない。そのような抵抗しがたい美を見出された者は、どんなドレスを着ても必ずや男心を傷つける。彼女たちの天上的な姿は外的な助けを軽蔑し、宝玉も彼女たちの目から光輝を借りるに過ぎない。そんな女性たちが、ブリタニアよ、汝の宮廷に現われ、美女揃いの中で美の中心にあつても名声を挙げる。星のまたたく夜に惑星のように光り輝き、粗野な美の中でひとときわ明るく輝く光を放つのだ。クインズバラ、マンチエスター、ベッドフォードが輝き、クーツが魅力にあふれ、汝フィールディングも美しい。頬がふくよかで常に赤らんで見える美しい。ニンフは、新緑のような緑色の服を着るがいい。そんなドレスを着て軽快な海のニンフは行く、海草の生い茂る海底で鮮やかな薔薇が輝くのだ。肌がハシバミのような薄茶色に似た娘は、輝くような黄色で地肌を乗り越えるがいい。だが頬が雪のように蒼白で、赤らみもなく、咲き誇る薔薇の輝きもないような美女は、何にもまして濃い深紅だけは避けるべきで、漆黒の悲しみに満ちた色合いを真先に選べ。まるで青白い月が夜の黒いマントをまとい、

一五〇

一五五

一六〇

一六五

この上なく清らかな光を放って常に輝くように。

一七〇

だが塗りたくった魅力で無用心な男心を傷つける
当てにならない技術はすべからず遠ざけよ。

舞踏は真の美が試される試金石のようなもので、
自然の手が拒むような魅力を許容してはならぬ。

一七五

ほんの一時、薔薇色の頬や美しい色合いの肌を
男たちは驚嘆しながら眺めるかもしれないが、
舞踏はすぐさま頬を照り輝かせ、珊瑚色の唇や
雪のような首を溶かしてしまうことになるからだ。

一八〇

まるで氷の枷をはめられた野原が輝く一方で、
凍りついた寶石が地面いつぱいにちりばめられる。
きらきらと光る雪の澄み切った水晶を通して、
顔赤らめるサンザシが真紅に輝いている。

野原いつぱいに数え切れない光輝がきらめき、
新たな輝かしい創造が目を魅惑する。

一八五

やがて遂に春が来て、ゼフィルスの温和な風や
暖かい微風をともなつて、凍った大地を緩める。
するとたちまち一時にきらめいていた情景は崩れ、
束の間の光輝もすっかり消え失せてしまうのだ。
野原は自分のものではない様々な美を取り戻し、
雪の魅力はすっかり滴り落ちて流れ去っていく。
そのような極めて重大な時点で忠告しよう、

一九〇

巨大なスカートの張り骨に私は異議を唱える。

自分自身しばしば不都合を見出したからであり、
計り知れないほど大きな円を描いて踊ったため、
向こう脛は何度も傷ついて黒いあざが痛々しい。

一九五

ぴんと張った支柱をあまりにまっすぐ張るな、
鯨骨の束縛でほっそりした腰を擦りむくな。

舞踏する美女よ、波打つ垂れ飾りや、ぶら下がる
房飾りのついた装飾りを身につけてはならぬ。

二〇〇

薄物の装飾は、金メッキのざらついたボタンが
近づくと、ひっかかって取れなってしまうのだ。

いったんゴルディアスの結び目が絡まれば、
どんな力も技も縛めを解くことはできない。

二〇五

まるで不幸な夫婦が、ハイメンの力によって
折り合いの悪い時を一緒に過ごすようなものだ。
互いに自由を取り戻そうとして揉み合うほど、
解くことのできない鎖が一層きつく締まる。

恥辱になることを恐れる各々の美しいニンフは、
常に靴下留めをしつかり結んでおくことだ。

二一〇

緩んだ紐が、公の舞踏会の場で落ちてしまい、
高慢な伊達男の望んでいた褒美とならぬように。
男はその貴重な宝物を勝ち誇って見せびらかし、
彼女の頬は燃えるような赤面であかあかと輝く。

したがって聖ジョージ像とガーター勲章は
ブリタニアの貴賓を飾る(名声が同意すれば)

二二五

かつて卓越した名声を持つ豪胆なエドワードが、
三代目の英国王としてその名を名づけたのだ。

名声高きブランドジネット、古の英国の栄光と、
君主の想い者である、神々しい美女が、

二二〇

礼儀正しい雰囲気で国王主催の舞踏会に現われ、
(言い伝えによれば) 快い戯れで緩んだ、

彼女の緩んだ靴下留めが床の上に落ちた。

慇懃な国王が愛すべき賞品を拾い上げると、

彼女の頬には真紅の薔薇が咲き誇ったという、

二二五

国王は誇らしげに戯れながらそれを高く掲げ、
叫ばれた「歎くな、我が美女よ、僅かな損失だ、

あらゆる花咲く魅力は時によって移ろい、

流れるような髪も塵となつて横たわることになる。

この輝く靴下留めは、決して失われぬ名声で、

二三〇

この先の時代までもずっと汝の名を留めよう。

この栄誉の印を英国の勇者たちは身につけ、

至高の国王たちも誇りを持つてつけるであろう」

二三五

今や詩神に私の愛すべき責任を思い出させよう、
彼女たちが失念して、扇を置いていかぬように。

おお、ニンフたちよ、かわゆい装身具を脇に置くな、

二三五

装身具は使い古しと誇りを同時に表わすもの。
すばらしき道具たる扇は、魔法の魅力によって、
汝の胸を冷やす一方で男たちの胸を熱くする。

どんな大胆な詩人が、この小さな道具に宿る
数々の力を語ろうと試みるであろうか。

二四〇

いかなる詩行がその様々な部分、無数の用途、
また動きや、魅力や、技術を説明できようか。
彩色を施された折り畳みは大きく広げられて、
苦しむ美女の泣き腫らした美しさを覆い隠す。
秘密の悲哀が彼女の悲しむ胸をいっぱいにし、
ストレフォンは不親切、シヨックは病気だ。

二四五

落胆した彼女の目が扇の骨を熟視し、

彼女の先細りの指が何度も何度も数える。

素直な乙女は人に言えぬ恥に身を焦がし、

二五〇

同意して死ぬが、自分の恋の炎を恐れもする。
勝ち誇ったように振り、勝利に満ちて叩き、

怒りからはためかせ、気まぐれに軽く叩く。

控えよ、我が詩神よ、延々とこの主題を歌うな、

汝の弱々しい翼をそのような飛翔に委ねるな。

二五五

むしろ慎ましい詩行の中で、この道具がどこから
その形と名を得たのかをはつきりと示すがいい。

扇がどんな理由から最初に誕生を遂げたのか、

いかに天上で形作られ、いかに地上に導かれたか。

かつて恋の座として名高いアルカディアに、

森の誇りであるひとりのニンフが住んでいた。

あらゆる魅力に飾られた愛らしいニンフは、

すらりとした体型で、甘美に花咲く顔だった。

その娘の名はファニー、美しくまた貞節で、

乙女たちの嫉妬的、若者たちの絶望的。

彼女の耳を魅惑しようと競う羊飼いは歌い、

柔らかなフルートを吹き、震える弦をかき鳴らす。

彼女のために忘れられた羊は勝手にうろつき回り、

その一方でファニーの名は森じゅうに響き渡り、

あらゆる木に恋の結び目が封入されて広がる。

フィールディング嬢の目がすべての心に火をつけるが、

美しさでも、名前でもファニーと同じことした。

真夏の太陽が、今や高々と天に昇り、

強烈な光線が灼熱の空を熱くする頃、

涼しい木蔭の避難所の下で、暑さを避けようと、

この愛らしいニンフが体を横たえていた。

灼熱の天候は、もともと赤らんでいる彼女の

頬の上にさらなる赤らみを広げていた。

美しい胸は磨き上げた大理石のように白く、

半ば隠されていたが、半ば人目に晒されていた。

二六〇

二六五

二七〇

二七五

彼女が横になっていると、力ある神が通りかかった、

すべての風を支配し、荒れ狂う天を鎮める、

アイオロスで、その鎖きは眠れる海を波立たせ、

怒り狂う波に再び静まれと命じる神であった。

神はしばし立ち止まり、愛の歓びを心に抱いて

見つめ、その危険な光景で毒を吸い込んだ。

神は恋し、胸の苦しみを打ち明けようとしたが、

神は常に恋し、常に愛は報われないのであった。

無情なニンフは、彼の溜息に構わず、彼の愛情も

気にせずに、自分の恋に浮き足立っていた。

常に彼女は不満を漏らす、風を支配する神が、

ゼフィルスに自分の顔のあたりにそよげと、

優しい微風が暗い森の空地を縫って、灼熱の

真昼を涼しくせよと、命じてくれないのかと。

恋と喜びの様々な希望にそのかされて、

頭のよい神はこのかわゆい道具を発明した、

扇はゼフィルスとともに彼女の火照る炎を鎮め、

愛らしいファニーの名からファンと名づけられた。

二八〇

二八五

二九〇

二九五

第二巻

見よ、今や活発な舞踏を先導する準備が整った、

愛らしいニンフや着飾った若者たちが進み出る。
 だだっ広い部屋が陽気な客人たちを迎え、

心地よい重さにのしかかられて床が打ち震える。
 両側に様々な色の衣装をつけて隙間なく並び、

美女が輝く絹をまとって我々の眼を驚かせる。

まるで花が咲き乱れ、草の生い茂った川岸に、

暖かい微風や温和な驟雨で生気を取り戻した、

銀色の雪の中で飾られた愛らしい百合や、

色とりどりに美しく輝くチューリップ、

顔赤らめる薔薇や、様々な色合いのなでしこ、

真赤なヒアシンズや、青いスマレなどが、

一番立派な衣装をつけて、一緒に立ち上がり、

あでやかに混ざり合って目を魅惑するがごとし。

彼らの頭上には高々と無数の蠟燭が光り輝き、

大きな燭台の枝々が黄金の光線を振りまく。

その黄金の光線は、下方の宝石や瞳からの反射を

浴びて、なおいつそう明るく輝いている。

数え切れぬ扇が、混み合った美女たちを冷やし、

そよぐゼフィルスが循環する風に動きを与える。

活発なフィドルや、響き渡る豎琴に、

若々しい胸が豊かな興奮を吹き込んでいる。

あらゆる歓びに満ちて、至福の時は飛び去る、

五

音楽が耳をとろかし、美が目を魅了するのだ。

今や若者たちを、至上の場所へ向かわせよ

最初にきらめく舞踏会を飾る者たちの一員だ。

低くお辞儀をして、手を差し出して準備する、

群れの中から選り抜いた美女を導き出すがいい。

美女は彼の礼儀正しい要求を拒むことはなく、

快い骨折りのために劣らぬ熱意をもって飛び出す。

だが止まれ、性急な二人よ、教えを受けずに進まず、

舞踏を試みる前にまずは詩神の言うことを聞け。

技術に導かれて、泡立つ大海原を越えて、

岩礁から安全に色彩を施された船が滑り出る。

技術によって、四輪馬車は埃っぽい野を疾走し、

鞭に跳び上がり、引き締められた手綱を聞く。

技術に我々の肉体は服従しなければならぬ、

優雅に易々と動き回ろうと望むのであれば。

汝ら美女よ、生まれつきの魅力や熱い胸で、

我々の眼を引きつけられると思つてはならぬ。

それも、この詩行が伝授する規則を、舞踏術の

有益な教訓を汝らが学んだ上でのことなのだ。

まず、どの舞踏会もフランス風舞踏が始まり、

それが済むまでカントリーダンスは挟まれない。

詩神は前者で最初の仕事を飾ることにして、

二五

三〇

三五

四〇

四五

適当な場所を得て後者が後で来ることになる。

フランス人は（古代の伝説が正しく語るなら）

規則で作られた舞踏においてまず抜きん出た。

彼らは初めて舞踏術に十分な完成をもたらし、

確かな指針によって確かなステップを教授した。

その後すべての快い技巧に満ちた舞踏が始まり、

創案者にちなんでフランス風舞踏と命名された。

賢明な自然は、常に思慮分別に満ちた手で、

様々な贈り物をあらゆる国々に分散させる。

あらゆる国々に対して、出し惜しみしながらも、

ある特定の技術に抜きん出た才能を賦与する。

ドイツ人は機械に関して最も成功を収めており、

オランダ人は交通で、戦争はスウェーデン人だ。

英国は最果ての島々を発見し、地球を周回して

航海するという偉業を正当に成し遂げたのだ。

愛に満ちた平和の術がイタリアの野を飾り、

そこでは絵画と詩歌と音楽が支配している。

甘美なコレッリが最初にヴィオールをつま弾き、

ラファエルが絵を描き、ヴィーダが歌った。

だがガリアはあらゆる国に対して舞踏と衣装で

遙かに抜きん出ていると告白するに違いない。

大いなるイタリアに名声ある国民を自慢させよ、

英国はドレイクとカンディッシュの名を示せ。

ドイツは最初に印刷術を創始し、人を殺戮する

銃を作り上げたことを榮譽とするがいい。

フランスは一つの価値の代わりに十の産物を作り、

諸芸と人間の双方において同様に際立っている。

フランスから剣の下げ緒や優れた部分鬘が飛び出し、

フランスからルギヤルドや有名なラブが生まれた。

フランスから、色男たちよ、白粉をつけた肩や

粹な雰囲気で美女を魅惑する術を学ぶがいい。

フランスから、美女たちよ、恋人の心を征服し、

確保する数え切れぬほどの術を学ぶがいい。

しかめ面に微笑、小首を傾げ、舌足らずで話し、

叫んでみたり、囁いてみたり、その他諸々の術を。

我々の上品な舞踏はすべてフランスのおかげだ、

活発なりガドゥーンに、ゆっくりしたルーヴル、

長いこと踊る者のいないボレーとクーラン、

不滅のメヌエットに、甘美なブルターニュ。

だがフランスの最もすばらしい才能は、何よりも

壮麗な仮面舞踏会を産み出すことに発揮された。

そこにはあらゆる芸術の力がひとつに集められ、

舞踏会は完璧な光彩をまとうて輝き出すのだ。

マホメットの想像たくましい天界で、あらゆる

五〇

五五

六〇

六五

七〇

七五

八〇

八五

感覚に同時に歓喜が訪れるようなものだ。

九〇

数え切れないほどの衣装がさまよう目を楽しませ、
光り輝く金やきらめく宝石でまばゆいばかりだ。
とびきり美味しい砂糖菓子がつずたかく積まれ、
熟した果実が房をなして手を伸ばすように誘う。
神酒のような葡萄酒は泡立つ流れとなつて溢れる、
シャンパーニュの聳える山が産み、ブルゴーニュの
野で甘美に育った葡萄酒が何であれ揃っている。
舞踏はすばらしい夜を歓びで飾り立て、
音楽は丸天井になつた屋根に響き渡る。

九五

数え切れない従順なニンフたちが我々の喜びを全うし、
最も厳格に淑女ぶる女もここでは内気でなくなる。
彼女たちは用心深い親の目をもはや恐れない、
嫉妬に溢れた、寝取られ男、油断ならないスパイだ。

一〇〇

この上なく冷淡な娘たちもお上品な赤面はなしで、
素顔を隠す仮面が心のうちをさらけ出すのだ。

一〇五

暴君が我々を苦しめようと画策し、顔を赤らめ、
しかめ面をしてみせても、すべては無駄なこと。
恋する男が不安になるうか、優しい猫かぶりが
脅かすしかめ面を隠すが、同意する目を見せる。

一一〇

舞踏術は長いこと固定化されず自由であった、
そのため錯誤や不確実性のうちに失われてしまった。

心に留めるべき指針も従うべき規則も存在せず、
各々の教師がばらばらに教えていたのであった。

新しく生まれた舞踏は十分に試される前に、
愛らしい産物は開花するそばから廃れていった。

一二五

様々な手がひどい混乱の中で激しく揺すぶられ、
ステップは変更され、美しさが失われていった。
やがてフォイエが、偉大な名だ、ついに現われ、
舞踏を性格にしたがつて構成するに至った。

彼は各々の愛らしい優美さを確かな目印で教え、
あらゆるステップを永久不変の書物に記した。

一二〇

以後、快い舞踏術は世界中に広まるようになり、
あらゆる国であらゆる舞踏が読まれたのだ。

遠い異国の教師が各々のステップを見てくれる、
間に山脈が聳え立ち、大海原が唸りを上げようと。

一二五

舞踏術は、全世界的な名声に対して、

姉妹芸術と等しい権利を主張することになる。

アイザックのリガドゥーンは、ラファエルの絵や
ウエルギリウスの歌と同様に永続するであろう。

用心深い詩人よ、歌を試みようとする前に、

一三〇

まずは静かにはばたいて、弱々しい翼を試せ。

大胆な天才が、並外れた炎で、自分の魂に

靈感を吹き込んでくれると分かった時には、

ただちに高遠なオードで天へ舞い上がり、
英雄たちや神々たちだけを歌うがいい。

一三五

また儼かな悲劇の韻文で、自分の詩神に

王侯や国王たちの役割を演じさせるがいい。

だが詩神が震えて高く飛ぶことを恐れるなら、

もつと穏やかな哀歌へと下降していけばよい。

絶望してもなお自分の機知を見出せるなら、

愛に満ちた物語や哀歌には不似合いである。

だが牧歌で成功を収められるかもしれない、

手際よく葦笛で牧歌を吹き鳴らすがいい。

同様に舞踏家も、動きを試してみる前に、

注意深く、体力や体重や才能を試してみよ。

優しい自然の贈り物が舞踏術にふさわしい

適切な資質を与えてくれたと分かったなら、

自分の中に活動的な肉体と生き生きした精神が

ひとつに結ばれていることを感じたなら、

敏捷なりガドウーンの時に、またルーヴルの

ゆつくりと儼かな舞踏の時に進み出るがいい。

だが才能も、熱意も、情熱も欠けているために

かくも気高い術に憧れることがないのであれば、

やさしい足の運びで満足するとして、穏やかな

メヌエットの円を描く迷路をたどるがいい。

一五五

これも難しすぎると思うならば、控えておいて、
カントリーダンスに関心を限定すればよい。

真の舞踏は、真の機知と同じで、長所にのみ

合わせた自然によって最もよく表現される。

詮索好きな目を満足させるふりができるのは、

敏捷な跳躍でも高々と飛び上がることもない。

正しい判断は曲芸まがいの芸当には気もかけず、

難儀そうだから美しいと考えることもない。

舞台での舞踏では、技術をもって演じれば、

そんな活発な離れ業は我々の眼を驚嘆で満たす。

尋常ならざる肉体をもった者であるならば、

この困難な道を進んで名声を求めるがいい。

豊穡なピンドロスは粗野な道を軽蔑して、

雲間を抜けて驚の高さにまで飛翔する。

一方慎ましい舞踏家は、登る山の高さを恐れ、

麓のタイム咲き乱れる中で羽音を立てる。

静かにゆつくり円を描く動きに集中するや、

勢いよく跳躍して高々と跳び上がり、

人の眼に見えぬほど早く、高く跳び上がるや、

途方もない高さから着地して傷ひとつない。

プロテウスのように、無数の姿に変身し、

神になったかと思えば、道化にもなるのだ。

一七五

一七〇

一六五

一六〇

ここで我が詩神よ、忘れずに触れねばならぬ、
名声を求めてロープの上で大胆に振舞う冒険家を。

一八〇

見よ、敏捷な若者が高い所に登ったかと思うと、
翼の助けも借りずに飛ぶように見えるさまを。
マイアの息子にしてジョーヴの使者のごとく、
彼は天上からの命令を運んできたかに見える。
無関心な表情で下方の群集を見下ろすと、
その視線も震えも彼の動きを見守るだけで。

一八五

ダイダロスがクレタの海の上を飛んだ時に、
海岸で人々が賛嘆して立ち尽くしたとし。

名声に導かれて人間が試みないものがあるつか、
いかなる労苦や危険が野心を馴らせるだろうか。
慎重な自然の賢明な命令が、泡立つ大海原で
遠くの陸を隔てようとしたところで無駄なこと。

一九〇

何人も侵すことのできない境界を傲慢に飛び越え、
帆や櫂で人間は大海原を横断していくのだ。

高く舞い上がる翼を自然が拒んでも無駄なこと、
技術は細い紐で欠けている部分を補うのだ。

一九五

ロープの上で無事に敏捷な芸術家は揺れるが、
太陽が蛾でできた翼を溶かす心配はないのだ。

我々は舞踏のある一巡を辿ろうとして、どこで
沈むか跳ねるかを正確に知ろうとするが無駄なこと。

あらゆる動きの中に、名づけようのない優美さと
ふさわしい物腰が常に見られるに違いないのだ。

二〇〇

自然がぎこちない姿勢をいつたん修正した所で、
教師があれこれ世話を焼いても無駄なこと。

そんな人々はむしろ田園の狩りに専念させて、
疾走する野ウサギや臆病な鹿を追っかけさせよ。

二〇五

同胞たる獣を追跡することが常に彼の娯楽で、
田園の征服こそ彼の名声を最も高めることになる。
洗練された舞踏術に決して憧れることなく、
田舎紳士の分を越えて飛翔しようと思わなかれ。

私はぎこちない田舎者を軽蔑する一方で、
弱々しくめめしい態度にも忠告はしない。

二一〇

同様の蔑視をもつて私は伊達男を嘲笑する、
舞踏はさせずに女性の脇に侍らせておくがいい。

美しいニンフよ、いずれ劣らずに用心して、
愚かな鈍感さや、媚を売る仕草は避けるがいい。

二一五

絶えず地面を愛する目をして、だらけたままで、
回転する独楽のようにぐるぐる回るのは止めよ。

また軽薄な顔つきで、気まぐれで自惚れて、
あたりを見回し、端から端へ跳ねるのも御法度だ。

舞踏ではあらゆる過ちを避け、何よりも先ず
拍子を正しく合わせることに専念するがいい。

二二〇

この重要なひとつの点でつまづく者は、他のあらゆる過ちを修復しようとしても無駄なこと。

このためには、いざ手と手を合わせて立ち、若々しい男女が踊り出そうと切望している時に、

二三五

しばし敏捷な足が動き出すのを押さえて、

曲に合わせて軽く床を鳴らして拍子を刻め。

ニューマーケットの野原でなめらかな二匹の

競走馬が、はみをほとんど含まず、手綱も締めず、

我慢できずにピロードの芝生を跳ねまわり、

二三〇

踏みつける脚で緑なす地面を蹴り上げることし。

あらゆる見物人が、汝のステップの紛れもない

過ちを見出せないだけでは十分とは言えない。

舞踏と音楽が実に見事にひとつにならねばならず、

各々の調べが汝の足に木霊するように見えねばならぬ。

二三五

名づけえぬ優美さが個々の動きに宿らねばならず、

それは言葉では表現できず、指針も教示できない。

教わるのではなく、甘美なカマーゼンの姿や、

ゴアの魅力的な物腰から常に見て取らねばならない。

フィールディング嬢が誕生祝いの舞踏会で踊った時、

二四〇

無数の求愛者たちを魅了したのはそんな物腰だ。

カミラが野原を滑るように進み、無数の英雄たちの

屍を越えて疾走した時のように、滑らかに。

万歳、最も愛らしい芸術よ、あらゆる心を虜にし、最高の美女をさらに美しく見せることができるのだ。

二四五

美の女神といえども、舞踏の女神から片腕を

借りなければ、十分に力を発揮することはできない。

ピグマリオンのごとく、生気のない魅力に溺れ、

彫像を両腕で抱くことを好む者は滅多にいない。

だが石のような心も、技と動きが眠れる炎を

二五〇

目覚めさせれば、愛の欲望に溶けるに違いない。

ヴィーナスが、偉大なアポロに手を引かれて、

しばし我々のさまよう視線を意のままにする。

だが常に、技の力をすべて集めて作られても、

命なき彫像には心を熱くすることはできない。

二五五

だから美しいニンフは、おそらく優美な手足を

動かさない間も、目を楽ませるかもしれないが、

舞踏の中で彼女の魅力が発揮された時には、

あらゆる心が愛らしい娘を褒め称えるであろう。

舞踏は彼女の美しさを最も見事な光の中に置き、

二六〇

各々の美を十全に、完璧に、輝いて見せるのだ。

彼女が旋回する時に、ヤマアラシのごとく、

体のあちこちから、突き刺さる矢を放つのだ。

快いが危険に満ちた彼女の目を避けようとする、

愚かな見物人もいるが、ああ、無駄なことだ。

二六五

バルティア人のように、彼女は愛らしい巻き毛と象牙のような首を傾けて、背後の者をも傷つける。

彼女の足取りは、メヌエットの迷路を辿ろうと、ゆったりとしたルーヴルの儼かな調子を辿ろうと、リガドーンが彼女の注意を一心に集めようと、

活発なジークがすばやい動きの美女を見せようと、その一步一步に、我々は新たな美を捜し求めて、我々が以前に嘆賞していたものを今や崇拜する。

まるでアイネーイスがタイアの森で魅惑的な愛の女王、美しいヴィーナスと出会った時に、

美しい女神が身じろぎもせず立っている間は、森の守護者たる、うるわしいニンフに見えたが、動き出した途端に、その天的な物腰と優美な足取りで、輝く美の女王であると自然に分かり、新たな栄光が彼女の姿からたちまち立ち上って、すべての女神たちが彼の目の前に現われたことし。

第三卷

古の日々に良きアーサー王が

英国の王冠と王笏を手にしていた頃、

美しく開けた林間の空地で、夏の夜になると毎晩、

シンシアが銀色の光線を降り注いでいた。

陽気な妖精たちが、草の生い茂る川岸の柔らかな絨毯の上で活発な舞踏をしていた。

小人の王様と小さな女王様と一緒にあって、小さな輪を描いて平らな緑地に印をつけた。

柔らかいフルートや温和な笛に響けと命じれば、音楽が震えるように森の中いっぱいに広がった。

座って笛を吹いていた孤独な羊飼いたちや、日々の仕事から遅くなつて戻り、行き暮れた

農民たちが、森の木蔭から、妖精たちの

気まぐれな戯れや陽気な浮かれ騒ぎを盗み見た。ここから教わって、ブリテン島の隅々にまで、

その快い運動を好んで真似ようとして、

栗茶色の娘や敏捷な若者たちが、すてきな楽しみを試そうと、あらゆる徹夜祭に出かけた。

また陽気な五月が巡つてきて、

緑の野原は一番豊かな衣装を見せびらかす頃、揺れる柱を高々と固定し、誉れ高い花々を

空へ向けて飾り立てた、そのまわりで、

若々しい男女が敏捷な舞踏を始めると、

田園の美女たちが新緑の野原いっぱいに広がる。手前で新しいダブレットを着たバンキネットが、

青いリボンがきれいな、赤ら顔のマリオンと、
奥では清潔なピンナーで飾ったプロウジンダが、
優しいコリンと、平らな緑地を踏みしめている。

四方にはアイオロスの音楽家たちが立ち、
両肘を動かしながら空気に膨らめと命じている。

膨らんだ空気は調べ良き笛を奮い立たせ、
あらゆる胸に豊かな炎を目覚めさせるのだ。

こう教わって最初にカントリーダンスが始まり、
その後には街や宮廷へと走るように広まっていった。

引き続く時代が、時宜を見計らって、様々な
改良を加えることで気高い芸術へと高めていった。

野原や森林から宮殿へと移っていくにつれて、
貴賓の者たちも快い運動を認めるようになった。

活発なフィドルや甲高いトランペットが響き、
丸天井になった屋根いっばいに木霊した。

輝く宝石や絹、プロケードやリボンが加わって、
舞踏会は完璧な栄光に輝くことになった。

最初に悲劇の女神が荒々しく姿を現わし、
田舎の民には彼女の声しか聞こえなかった。

ねじれた木々が涼しげなあずまやを作り、
満足した観客たちが木蔭の下に座っていた。

質素な舞台には緑のイグサが撒き散らされ、

三〇

三五

四〇

四五

大股で歩く俳優たちは荷車で運ばれてきた。
やがて時がようやく大いなる意匠に改良し、
場面が彩色を施した風景で輝くよう命じた。

そして芸術はあらゆる輝く機械を配置して、
パロス島の大理石で作られた劇場が現われた。

すると模倣した雷鳴が震える空を揺さぶり、
神々がいと高き塔から降臨してきたのだった。

今や若者たちよ、取り取りの美女たちの中から
用心深く舞踏の相手を用意深く選ぶがいい。

彼女が彼の選択を指示するよう熱望していれば、
教訓を垂れる詩人の声もここでは無駄なこと。

美は空想によつてのみ表現されるものであり、
様々な心が様々な姿形に魅了されるものである。

雪白の肌をこの好色な若者が称賛する一方で、
栗茶色の頬が別の若者の胸を燃え上がらせる。

小さな腰と細い手足に虜にされる心もあれば、
もつとふくよかな美女を愛する者もいる。

だが外見の魅力に判断が左右されてはならぬ、
汝の目よりもむしろ理性に従うべし。

舞踏においては、結婚の絆においてと同様に、
美しさよりもむしろ長所を基準に選ぶべし。

完璧な技術を備え、いつ動けばよいのか、

五〇

五五

六〇

六五

いつ静止すればよいかを知る女性を選べ。

七〇

そんな女性は教わらずに自分の分担をこなし、親切にも快い負担を半分は引き受けてくれる。結婚という状態に手枷足枷をはめられた、

希望のない哀れな男の運命は何と不幸か。

貧しく、愚かで、経験もない妻に無理やり

七五

人生の退屈な舞踏を先導されることになる。

そんな相手と組んだ男の運命はそんなもの、

動き回るだけの人形で心が入っていない。

常に彼の手は進む方向を指差さねばならず、

教える間もなく彼女はたちまち迷ってしまう。

八〇

彼女の愚行の下で彼は常にうめき声を上げ、

身に覚えのない過ちに絶えず赤面させられる。

だが今や見るがいい、手と手を合わせて、

両側に並んでお似合いの男女たちが立っている。

秘かな喜びと、愚かな歓びを心に抱きながら、

八五

寛大な若者たちは快い対決を心待ちにしている。

一方で愛らしい目はいつもとは違う光を発し、

雪白の乳房はステータスで押し上げられている。

忙しい手と反身になった頭が晒し出するのは、

男を熱望するニンフ、うずうずしている美女だ。

九〇

ここから遠く離れたところで見物人たちは、

我々の快楽を詮索する目つきで眺めている。

ここから遠いところにいる全員の厳しい顔には、

老齡が畑の畦のごとく深い皺を刻み込んでいる。

この辛辣な批評家たちは常に歓楽を台無しにし、

九五

自分の楽しい不快をすっかり駄目にする。

思慮深い御母堂が御令嬢を脇に呼び寄せて、

その無防備で他愛のない自由を叱らぬように。

怒りに眉をひそめて娘にお淑やかにと強いて、

彼女のお相手の快い希望をすっかり打ち砕く。

一〇〇

そんな説教のおかげで、無害な処女の頭の中は、

わざとらしさや冷たい侮蔑が詰め込まれる。

そんな説教のおかげで、生まれつきの無垢を、

女性特有の手管と高慢で隠そうとするのだ。

善良な心根の美女に向けられた厳しい説教は、

一〇五

美德が耐えられないほどの引き締めなのだ。

度を越した口づけは御令嬢の名誉を汚し、

名声を取り戻すには結婚すなわち死あるのみ。

愛人が粗野なために我が身を刺すことになった、

愚かに淑女ぶったルクレティアの話もする。

一一〇

老人たちがそんな考えを浸み込ませるために、

我々の集会ではしばしば口論が湧き起きる。

舞踏会は、歓楽のために企画されるが、結婚や

流血沙汰という悲しい不運で終わることが多い。

あのエロディアが（死をもたらす美女の名前だ、

輝かしい舞踏家であると同時に恥辱の象徴であった）

滑るような舞踏で美しい肢体を曝け出していると、

ヘロデ王の宮廷では皆が愛らしい娘を称賛した。

数え切れぬほどの心が彼女の美しい姿に賛嘆したが、

一番の御執心はユダヤの暴君王ヘロデであった。

彼女がぐねって舞踏するさまを彼は喜んで眺め、

ステップごとに快い苦痛を感じたのであった。

彼の視線は次々に釘づけになっていくのだ、

流れるような髪に、なだらかな曲線を描く胸に、

混じりけのない朱色に染まった頬に、

開花した薔薇が広がっている香り立つ唇に。

彼女がどこへ移動しようと彼の心と目は追ひ、

強力な暴君である愛も押さえられないほどだ。

舞踏が終わるやいなや、愛らしい娘に向かつて、

その手を握りしめながら、虜となった王は言った。

「天とあらゆる恵み深い神々にかけて誓おう、

天が取り消せぬ約束を聞き届けられますように。

囚われの王の心に命じることできる、

その万物を征服する目とこの美しい手にかけて、

汝がヘロデの畏怖すべき権力の座において、

望みを言いさえすれば、叶ったも同然だ」

彼女の用心深い母親が聖なる誓いを聞くと、

激しい復讐心がその額に重々しく宿った。

（以前から悔悛を迫るヨハネの声が、彼女の

不敬な生活、近親相姦、傲慢を非難していた）

彼女は愛らしい娘を傍らに呼び寄せると、

洗礼者の首を所望するようと娘に強制した。

愛らしい娘は涙を流し、嘆息しながら従い、

彼女の望みのために聖なる殉教者は落命した。

おお、残酷な母、余りにも従順な娘、

いかに汝らは弱々しい心を誘惑することが。

可愛い娘よ、母親の忠告に支配されないなら、

見事な腕時計や、きらめく指輪を求めて祈れ。

汝が選ぶのは、金びかしの四輪馬車、ダイヤの

ネックレス、あるいは衣装一式かもしれない。

最もお気に入りの望みを求めるとするならば、

着飾ったサル、すなわち夫を懇願するがいい。

だが汝の弱々しい心は、悪に慣れておらず、

神聖な血を流すことを企みもできないだろう。

汝の舌が御母堂の命令に従うこともなく、

彼女の忠告に導かれ、彼女の誓いを怖がるであろう。

人間の胸が復讐心と悪意に満ちあふれると、

一一五

一二〇

一二五

一三〇

一三五

一四〇

一四五

一五〇

一五五

人間が何か悪の道具としないものがあるのか。

宗教は長い間にわたって偽善者と司祭によって利益を得られる取引を不敬にも執り行ってきた。

法律は、創設者たちによって、人類の注意深い守護者となるべく企図されたにもかかわらず、

ずっと昔から単なる欺瞞の仮面と化してしまい、貧者を圧迫し、圧迫する富者を護ってきたのだ。

舞踏も女性の欲望と残酷さに対する女術となることを強いられてきたことは明白だ。

だが見よ、活発な舞踏が今や始まった、

あちらにこちらに眩暈のする迷路を駆け抜ける。すばやいステップで円を描きながら歩を進め、

皆混じりあって目にも止まらぬ速さで跳び上がる。

あたかも猛烈な速さで忙しく動く車輪の中では、動きの中でスポークが見定められずに消えることし。

ここに至って舞踏家に導き手はもはや不要で、彼の敏捷な足は厳格なステップに縛られない。

詩神の指針はここに至って無用の長物となり、誰も自惚れて、制限されず、自由になるのだ。

舞踏家はただ音楽の声だけに耳を傾ければよい、その声に導かれれば、過ちを犯すことはない。

舞踏を先導することが彼の分担になった時は、

一六〇

よく知った道を実際に進んでいくことができる。他の者が先導する時は、彼らの動きを見ながら、彼らのステップでくねる迷路を追っていけばよい。

思慮に満ちた頭と、省察に富んだ精神は、各々の舞踏に有益な倫理を見出すであろう。

「リス探し」では、我々の見守るニンフが、我々が逃げれば探し、我々が追えば逃げるのだ。

円舞になれば、我々の相手は次々と代わり、美女から美女へと我々は咎められずにさまよう。

自分のお相手から離れると、たちまちのうちに、別の男がその愛らしい賞品を捕まえるのだ。

お気に入りの若者がしばし彼女の魅力を楽しみ、また次に来た男が彼の腕から彼女を盗み取る。

すると前の男はもはや彼女の関心に値しない、不実な美女の何と真実の寓意であろうか。

天空の好奇心をそそる書物を読み解く哲学者や賢者たちは、天地創造の宇宙の枠組について、舞踏よりも正確な雛形を、

いったいどこで示すことができようか。

数え切れないほどの世界が、靈妙な道の上に輝く規則的な混乱となって迷っている。

あちらこちらで世界は空に沿って周回し、

一八〇

一八五

一九〇

一九五

二〇〇

近づいたかと思えば、はるか遠くへ飛び去る。
同じ隊形に集合し始めたかと思えば、

それで大いなる天上の舞踏はおしまいになる。

道学者は虚しい過ちや人間の人生について、
これほど正しい設計図をどこに見出せようか。

押し合う群れとなつて我々は骨折り汗かき、

自分たちの知らぬものをしきりに追いかける。

我々が小さく些細な行路を走りきると、

すっかり疲れて、始めたところに腰を下ろすのだ。

汝の腕に対して、親切な運命の寛大な気遣いが、

この上もなく美しい相手を与えてくれても、

汝の心が彼女の魅力に惹かれすぎぬようにせよ、

技術溢れる舞踏家の役割が疎かになるからだ。

美しい調べに耳を傾けている時に、彼女の耳に

くだらない戯言を常に囁くことのないようにせよ。

舞踏の最中に、戯れて自分の歓びを優先するな、

他の人々のステップを遅らせることになるからだ。

だが申し分のない舞踏がいつたん終わり、

拍手があらゆる男女の間を駆け巡つたら、

しばしの休息だ。逃れ去る至福を掴まえるがいい、

優しい囁きもよし、馥郁たる口づけもよし。

各々の秘かな望みも、愛の希望の告白もよし、

二〇五

彼女の喘いでいる乳房を手で押さえてやるがいい。
美女は微笑みながら汝の熱い想いを聞くであろう、
音楽が心を和らげ、舞踏が心の炎を燃やすのだ。

愛を織り交ぜながら、快い骨折りを追及せよ、
そのうちに歓迎されない朝が姿を現わし始める。

すると近づいてくる太陽が光線を放ち、

さえない蠟燭は弱々しい光で輝いている。

すると太陽がまさに大海原の上に昇り、

輝いていた目もほとんど眠りに落ちていく。

お節介な若者よ、準備の整った手で、選ばれた

美女を導いて無事に家まで送る用意をして、

朝の寒さの厳しい大気から彼女を守つてやれ。

暖かいフードで彼女の愛らしい頭を包み、

彼女の首をハンカチーフでくるんでやるがいい。

この腕を彼女の肩に回すことも忘れずに、

寒さから彼女のほつそりした腰を護つてやれ。

熱い口づけで彼女の馥郁たる唇は輝き、

夜の湿気や冬の雪でも冷たさを感じなくなる。

豊かな白葡萄酒に、熱い生姜を混ぜ合わせて、

彼女の体の内部を危害から安全に護つてやれ。

だが私の愛らしい弟子たちは、高潮した血が

冷たい少量の麦酒で冷えることを常に恐れる。

二二五

二三〇

二三五

二四〇

二二〇

二四五

ああ、思慮なき美女よ、誘惑する一杯を拒むのだ、
経験に満ちた私の詩神が前もって警告する時には、

悪い結果を汝の思考に巡らせ、危険に満ちた
将来の苦痛を現在の歎びと交換してはならぬ。

その毒をもった一服の中には破滅が潜んでおり、
死に至る熱病に罹り、鼻に吹き出物が現われる。

このように舞踏術の各々の指針を通じて、

詩神は親切な教育者の役割を果たしてきた。

詩神はあらゆる迷路を通して弟子を導き、

進むべき最も確実な道を指摘してきた。

もはや残ったものはなく、女神も歌をやめて、
羽根を下ろし、翼をはばたかせることもない。

疲れ切った舞踏家は羽毛のベッドに倒れ込み、
眠りの絹でできた紐が眠い目を縛り上げる。

喜びに満ちた夢が快い運動を思い出させ、
眠りの中でさえ、もう一度舞踏しているようだ。

今や私の惜しみない苦労も完成に至ったが、
この労作は死と時の力を物ともしないであろう。

鳥たちが従順な空を切るように飛び交い、
優雅な若者たちが光り輝く舞踏会に赴く限り。

我々が銀色の流れに魚を見出し、令嬢たちが
年を取った相手と組んでいらいらする限り。

ニンフたちが耳を澄まして、お説教よりも
むしろフィドルの音色を聞く限り。

光り輝く瞳が、私の教訓的な詩神の歌つ、

この有益な詩行を何度も吟味する限り。

美女たちは詩行の一節を書きつけた扇を持ち、
明るい伊達男たちがそれを読む、読めればだが。

注

ソーム・ジェニンス（一七〇四—一七八七）は、論説詩や諷刺詩を得意としたイギリスの詩人で、ここに訳出した作品は都会暮らしの上・中流階級に対する皮肉が込められた彼の代表作である。『舞踏術』（一七二九）は、ホラティウスの「詩学」やオウィディウスの『恋の手ほどき』を模倣した作品であり、またジョン・ゲイの『トリヴィア』（一七二二）を髣髴とさせる諸諷刺を帯びた表現を用いながら伊達男や尻軽女を揶揄している。なお一般には改訂を経た第二版（全二巻）が流布しているが、ここでは雑然さに満ちた初版（全三巻）を取り上げた。テキストには Anne Cotter, ed. *The Art of Dancing: A Poem in Three Cantos by Soame Jenyns* (London, Dance Books, 1978) を使用した。

第一巻

九行「フィールディング嬢」 第四代デンビー伯爵バジルの娘。ウィンチルシー伯爵ダニエルと結婚、一七三四年に亡くなる。

二三行「レア」 クロノスとガイアの間生まれたタイタン族の女神。ク

ロノスとの間にゼウスを初めとする神々をもつけるが、地位を奪われることを恐れたクロノスは生まれた子供たちを次々と飲む込んでしまふ。レアはゼウスをクレタ島に隠し、クレスと呼ばれる若者たちに武装して踊らせ、赤子の泣き声をかき消した。

六十一行「ピュロス」(赤毛を意味する名) アキレウスの子で別名ネオプトレモス(若い戦士を意味する)。トロイの木馬に潜んでトロイア王宮に討ち入り、ゼウスに命乞いをするプリアモスを殺したために、咎めを受けて夭折する。

六九行「アテネの賢者」 ソクラテスを指す。

八一行「ヘシオドスの聖なる詩行」 『神統記』を指す。

八三行「メリオン」 『イーリアス』に登場するギリシアの勇士。

九三行「パタン」 ぬかるみを選けるために靴の底にあてる木製の台
ジョン・ゲイの『トリヴィア』にパタン発明の挿話が収められている。

一一三行「ドラップ」 くすんだ茶色または灰色の布地。厚手の毛や木綿で織られている。

一一三行「ブロードクロス」 幅の広い高級黒ラシャでもともと男子服用。

一一七行「キャンブレット」 不明。

一一八行「ボードソウ」 丈夫な絹織物の一種。

一五七行「クイーンズバラ、マンチェスター、ベッドフォード、クーツ」 上流階級の夫人たちを指す。

二二四行「ガーター勲章」 一三四七年カレー占領を祝う戦勝舞踏会でソールズベリー伯爵夫人が靴下留めを落とした。エドワード三世はその靴

下留めを自分の左足につけて「それを悪いと思う者に災いあれ」と叫んだと言われる。これが左足につける英国最高の勲章の起源となった。
二四六行「ストレフォン、ショック」 牧歌に登場する羊飼いの一般的な名。

第二巻

六四行「ヴィーダー」 一六世紀に活躍したアルバの司教で詩人。『詩論』(一五二七)は英国で盛んに読まれた。

六八行「ドレイクとカンディッシュ」 フランシス・ドレイク(一五四〇-一五八〇年頃)とトマス・キャヴェンディッシュ(一五五五-一五九二)はいずれもイギリスを代表する大航海者。

七四行「ルギヤルド」 ドゥ・ルギヤルド。十八世紀のロンドンで活躍した舞踏家らしい。アイザックの『王宮のリガドゥーン』(後述)のタイトルに名前が載っているが、詳細は不明。「ラベ」 アントニー・ラベ(一六六七-一七五六年頃)はイギリス王室付きの舞踏教師で一世を風靡したフランス人。

一一八行「フォイエ」 ラウル・オージェ・フォイエ(一六五三-一七〇九年)はフランスの舞踏家・振付師で『舞踏術』(一七〇〇年)を書き、ジョン・ウィーヴァーが一七〇六年に英訳した。

一二八行「アイザックのリガドゥーン」 アイザック(本名不詳 一六四〇-一七二〇年頃)は十七世紀後半から十八世紀前半にかけてフランスおよびイギリスで活躍した舞踏家・振付師で、リガドゥーンは舞踏の一種。
一七二一年にアイザックによる『王宮のリガドゥーン』という題名の舞踏

教本が出版された。

一六八行「ピンダロス」 古代ギリシアの詩人。靈感を得て崇高な表現に満ちた三部形式からなる祝勝オードを得意とした。

一八二行「マイアの息子にしてジョーヴの使者」 ヘルメス。

二二八行「ニューマーケット」 ケンブリッジの東二〇キロにあるイギリスを代表する競馬場。

二三八行「カマーゼン」「ゴア」 上流階級の夫人たちを指す。前者はおそらくカマーゼン侯爵夫人。

二四二行「カミラ」 『アイネーイス』に登場するウォルスキー族の女王にして戦士。穂を揺らさずに麦畑を走り抜け、くるぶしを水に浸さずに海を踏破した(第七巻八〇七 十一行)。馬に乗りながら槍と弓矢で次々と敵を倒すが戦死する(第十一巻)。

二六六行「バルティア人」 イラン北部にあった古王国の民。弓矢に優れ、馬上で後ろを振り向き矢を射ながら退却した。

二七四 八一行「まるでアイネーイスが……」 『アイネーイス』第一巻三二

四 四一七行。

第三巻

二五 八行「バンキネット」「マリオン」「プロウジリンド」「コリン」

牧歌に登場する羊飼のおよび娘たちの名。

四一行「プロケド」 朱子地に文様を浮き織りした紋織物。

一〇〇行「ルクレティア」 ローマ王制末期のタルクィヌス・コラティヌスの妻。王の息子セクストゥスに凌辱され、父と夫に事実を話そうと三度試

みて果たせず、四度目に意を決して打ち明けた後、自らの胸を剣で刺し貫く。通例は貞女の見本である。

一一五行「エロディア」 ヘロデ王の妻でサロメの母。明らかにジェニズの間違いである。二版では削除された箇所。

一八五行「リス探し」 伝統的な舞踏曲でジグの一種。